

形容詞無助詞文と二価志向性の関連について¹

阪口 慧 (Kei SAKAGUCHI)

keisakaguchi24@gmail.com

東北学院大学 教養教育センター 特任助教

(要旨)

本研究は「ハンバーグ~~が~~美味しい」のような形容詞無助詞文と、形容詞文の解釈における二価志向性 (cf. Hayakawa 1931, Lyons 1977, Voßagen 1999) の関連を議論し、発話時に形容詞無助詞文が選択される理由を考察する。特に評価性を持つ形容詞が述語に表れる場合、無助詞文という形式の選択は、助詞による対比的意味の回避だけでなく、二価志向性により意図しない評価が伝達されることを避けるという点にも動機づけられる可能性を示す。その中で評価文の一形式として形容詞無助詞文は最も単純に対象に対して評価を差し出す文形式として確立した、いわば正当 (legitimate) な文形式であると主張する。

1. 頭語

食卓に準備された料理がいくつか並んでいる状況で、ハンバーグを食べ、そのおいしさに言及する場面を想定しよう。この時、日本語母語話者は形容詞叙述文を使用する場合、(1) のように無助詞の形式を選択することが多い。

(1) (食卓にはいくつかの料理が並んでいる)

花子：今日の料理、美味しい？

[ハンバーグを食べたところ美味しかったのでそれを伝えるために言う]

太郎：ハンバーグ美味しい

上記のように、日本語母語話者は自然と対比や排他的意味を回避した形式を選択し使用する。同一の場面で助詞「は」を生起させた (2) について考えよう。

(2) (食卓にはいくつかの料理が並んでいる)

花子：今日の料理、美味しい？

太郎：ハンバーグは美味しい。

この場合、主語となったハンバーグは他の料理と対比的に評価されているように感じられる。発話の意図が (1) と同様であれば (3) で示すようにコミュニケーション上の齟齬を生じる可能性がある。

¹ 本稿は東京大学総合文化研究科言語情報科学専攻に提出した博士学位論文の一部に基づき、加筆・修正を加えたものである。

(3) (食卓にはいくつかの料理が並んでいる)

花子：ごはん、美味しい？
 太郎：ハンバーグは美味しい
 花子：じゃあ他のはずいなの？
 太郎：いや、そういうわけじゃ…

上記の(3)における太郎の最初の発話は命題的意味だけ取り出す場合、ハンバーグについて「おいしい」という評価を示す文になるが、助詞「は」の対比的意味が顕在化し、述べられていない他の要素に対して否定的な評価を行っているように感じられてしまう。このような問題は英語の形容詞叙述用法においては生じない。同一場面で以下の(4)のように述べたとしても(3)のような齟齬は生じないと考えられる。

(4) *This (Hamburg stake) is delicious. / It is delicious.*

英語の場合に齟齬が生じない理由は、英語の場合には比較の意味を明示する形式が形容詞の形態変化によってもたらされることによる。上記の言語事実から本研究は日本語の形容詞叙述文において、形容詞の無助詞文は(i) 評価対象に対して単純かつ純粋に評価を差し出すため、(ii) 意図しない対比性を排除するため、(iii) 形容詞叙述文「XはA」という形式の解釈曖昧性から逃れるために成立した言語形式であると考えられる。

2. 先行研究

無助詞文の研究は、呼称こそ研究者により異なるが、尾上(1987)、長谷川(1993)丸山(1995)、野田(1996)、加藤(1997)、樋口(2000)、黒崎(2003)、苺宿(2014)によって展開されてきた。一連の研究を表にまとめたものが苺宿(2014)にあるため、引用する。

名詞の種類 先行研究	助詞がない形式 「ハダカ名詞」	助詞復元不可能 無助詞名詞	助詞復元可能 助詞省略名詞
尾上(1987) 尾上(1996)	記述なし	主語に「は」も「が」も 使えない文	記述なし
長谷川(1993)	無助詞	独自の機能を持つ「Φ」	単なる格助詞の省略
黒崎(2003)	(省略)	無助詞	省略
丸山(1995)	格の無形表示 無助詞格	記述なし	記述なし
加藤(1997)	無助詞	ゼロ助詞	助詞の省略

表1：苺宿(2014: 149)における無助詞文研究の比較

無助詞文の特徴に関し、黒崎は「顕在化された主題を表す名詞句に「ハ」を付けることで対比感が生じないよう無助詞が選択される。」(黒崎, 2003: 86)と述べている。この点に関し、本研究は無助詞文は単なる省略ではなく、当該形式のみがもつ意味・機能があるものとする。

3. 本稿で扱う問題に関わる概念と事実

以上みたように、無助詞文は対比性を背景化させるために選択される部分がある。ここでは形容詞が無助詞文に生起する場合、競合する形式がある中で無助詞文を選択する動機づけに関わる概念と言語事実を導入する。

3.1. 二価志向性 (two-value orientation)

Hayakawa (1931) が導入し、Voßagen (1999) によって意味分析に用いられた概念、二価志向性 (two-value orientation) は反義関係を有する形容詞の否定文の解釈の説明に有用である。二価志向性とは、述語がスケールを有する評価的意味を持つ場合、述語が否定された場合には、その評価性の中間などを取るのではなく逆の極性の評価的意味として理解されやすいという解釈の志向性である。このような解釈の志向性に関しては Lyons (1977: 278) にも言及がある。次の例を見よう。

(5) A: *Is X a bad chess player?*

B: *No.*

(Lyons, 1977:278)

上記の例においてチェス打ちの X の力量を A が問い、B は否定したとする。この場合、B の返答の解釈は論理的には「良くも悪くもない」という解釈があり得るが、「悪い」と解釈される。このような解釈の志向性が二価志向性である。

3.2. 日本語形容詞における比較級を表す形態変化の不在

英語の形容詞類は比較級、最上級を表す際に形態変化を伴うが、加藤 (2009) が言及するように、日本語の場合はそのような形態変化はなく、比較を示す場合には「より」などの副詞を伴う。次の例を見よう。

(6) こっちの方が大きい。

*This is bigger. / *This is big.*

(加藤, 2009: 87)

上記の (6) の様に、「～の方が」という比較を示すマーカがあるものの、形容詞自体は形態的变化を伴わない。そして、「こっちの方が大きい」という文の英語の訳を考えた場合には “*This is big.*” は不自然であり、“*This is bigger.*” の方が自然である。この点に関して加藤 (2009:87) は「日本語の形容詞はそもそも原級に比較級を含む (あるいは、その逆) という考えもある」と述べている。日本語形容詞は比較級を示す形態変化は伴わないという点は否定しないが、原級が比較級を含むという考えに関しては同意しない。後述するが、比較や対比を示すのは助詞の機能や、「～の方が」や「より」などの要素が、比較を示すマーカを担うと考える。

4. 考察

ここでは、形容詞無助詞文の解釈や使用の動機づけを探るために、形容詞叙述文として競合関係にある「X は A」の形式との比較を通し、改めて形容詞叙述文と二価志向性の関係、構文の選択について考

察する。

4.1. 助詞「は」の機能と二価志向性の連動による対比性と反対評価の発生

はじめに、「XはA」という日本語の形容詞叙述文の対比性に関して考察する。助詞「は」は Kuno(1973)によれば *thematic wa* (主題の「は」)、*contrastive wa* (対比の「は」)に分けられるとする。野田(1996)は対比的な「は」が生起する文の要素に関して言及している。次の例をみよう。

(7) AはXけれど、BはY。(野田 1996: 7)

野田(1996: 7)によると、AとBは同じようなカテゴリーに属す対象であることが多く、XとYは反対の動作や状態となる。文脈および、生起する要素によっては、「BはY」の部分が明示されなくとも「AはX」という点が対比性を帯びることはある。特に、形容詞の場合は二価志向性による影響が否定できない。(3)の例に対し、「は」による対比の意味、そして形容詞など評価性を持つ語が生起したことによって発生する二価志向性が解釈に及ぼす影響について考察する。

(8) ハンバーグは美味しい。(3)の再掲。同様の文脈とする)

⇒ [解釈可能性 1]

ハンバーグの美味しさに単に言及している。「は」の対比性、二価志向性が働かない解釈)

⇒ [解釈可能性 2]

ハンバーグ以外の料理は美味しくない(「は」の対比的意味による解釈)

⇒ [解釈可能性 3]

ハンバーグ以外の料理はまずい(二価志向性に基づく解釈)

(3)における「ハンバーグは美味しい」は「は」による対比の意味、及び二価志向性に基づく解釈が関与した場合、「ハンバーグ以外の料理」に対して否定的な評価を話し手が持っているという解釈が得られる。つまり上記(7)の形式の内、「AはX」と述べた場合、Xが持つ評価性と反対の評価性(もしくはそれと同等のB)をYに与えることに繋がる。形容詞の場合、評価的な側面が強く感じられるため、XとYのもつ評価性の反対関係がより前景化し、非明示的な反対の評価が与えられるという点が顕著である。無論、評価の意味が関与せず、「AはX(というものだ)」のように定義的な意味を表出することもできる。この場合の「は」は「ハンバーグ」がもつ恒常的な特性を述べる主題文といえるだろう。上記のような解釈可能性があるため、日本語母語話者は無助詞文を使用すると考えられる。では、改めて形容詞無助詞文の解釈可能性について考えよう。

(9) ハンバーグの美味しい。

⇒ [解釈可能性 1] ハンバーグの美味しさに単に言及している。

(9)のような文においては(8)における[解釈可能性 2~3]は存在せず、[解釈可能性 1]に収束する。評価性は形容詞に限定した特徴ではないが、形容詞の語の多くは評価の意味を持ちうるため(cf. 樋口 2001 ほか)、助詞による対比的解釈及び二価志向的解釈の回避は、形容詞無助詞文において特に顕著

であり、会話における助詞落ちを積極的に動機づける一因となっていると考えられる。この特徴が評価性を持つ形容詞が現れる無助詞文において顕著である点を見るために次の例について考えてみたい。

(10) 太郎は走った。

⇒〔解釈可能性 1〕太郎が走ったことに単に言及している。

⇒〔解釈可能性 2〕太郎以外の人物は走っていない。（「は」の対比的意味による解釈）

(11) この車は赤い。

⇒〔解釈可能性 1〕眼前の車の色に単に言及している。

⇒〔解釈可能性 2〕言及している車以外の車は赤くない。（「は」の対比的意味による解釈）

上記のように、(10)において「は」が対比的な意味を有する場合には〔解釈可能性 2〕のような解釈は可能だが、動詞「走る」が固定的な対義語を持たないため二価志向的解釈は生じない。また、(11)のように評価性を持たない色彩形容詞などの場合には二価志向的解釈が関与せず、「他の車は黒い」といった解釈は生じない。先に論じた通り、二価志向性は形容詞の評価性が関与するため、反対の評価語を想起させない語が述部に表れた場合は上記のような解釈は生じない。このような場合には意図しない評価を避けるという動機づけがそもそも不要であるため、無助詞文の積極的な選択は行われぬ。

4.2. 日本語の規範文法における無標の評価文の不在、無標の評価文としての形容詞無助詞文

ここで形容詞無助詞文の使用が、単なる省略ではなく語用論上の意図しない評価を避けるために戦略的に使用されているという点を有標性の観点から議論する。加藤（2009）の言及にもある通り、英語の形容詞は形態変化もしくは *more* を伴った比較級を用いての文の対比性という点をマークする。

(12) *This is tasty.* （対比的評価性：－（無標））

(13) *This is tastier than other dishes.* （対比的評価性：＋（有標））

(14) このハンバーグは美味しい。（対比的評価性：±（有標・無標の境界事例））

(15) このハンバーグはより美味しい。（対比的評価性：＋（有標））

(16) このハンバーグが美味しい。（対比的評価性：－（無標））

上記のように、(12)のような形容詞叙述文を無標の文とした場合、比較級を用いた(13)は有標的である。樋口（2001）の述べる、形容詞文が対象に対して評価をさしだす、という機能の有標性において、(12)のような英語形容詞叙述文は無標の評価文であるといえる。一方、日本語の場合はすでに論じた通り、規範的な形式「XはA」という形を取る限り、(8)などで見たように対比的解釈可能性を帯びている。無論、対比的ではない解釈の可能性もある。したがって、(14)に示すように、対比的な評価性は有標と無標の境界事例であるといえよう。また、日本語にも(15)のように比較構文（cf. 小原 2015）を示すマーカーが明示される有標的な対比文は存在する。このように、日本語形容詞文では、形容詞そのものによって対比性をマークすることはできず、助詞および共起要素が対比性の標識となる。つまり、規範的な形容詞叙述文において、対比的評価性に関して無標的な文形式は存在しないということである。一方、形容詞無助詞文は(9)で確認した通り、対象の特性に対して単に言及することを可能にする。(16)に記す通り、形容詞無助詞文は、対象に対してのみ言及し純粋に評価を差し出すことのできる唯

一の形式であり、無標的な評価文であるといえる。このことは、必要な場面における無助詞文の選択と使用を動機づけ、かつ、助詞の単なる省略ではなく、言語形式として正当 (legitimate) な形式であることの証左であると考えられる。

4.3. 書き言葉の中に表れた形容詞無助詞文の実例

前項までの考察では、発話場面を想定しており、話し言葉における形容詞無助詞文の分析を行ってきた。ここでは、形容詞無助詞文の使用は話し言葉に限らない点を確認する。コーパスを用い形容詞無助詞文が書き言葉に表れた場合を観察し、どのような文脈で用いられているのか、また、何故その文形式の選択に至ったかを推察する。用例採取にあたり、形容詞「おいしい」の叙述用法を現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) を用いて調査すると、語彙素「おいしい」の終止形は 3,342 件の例が観察された²。本研究で扱っている無助詞文の用例を抽出するために、前方共起語 (一語前) を名詞に限定したところ、86 件の例が観察された³。抽出例のうち、「XはA」のXに形式名詞などが現れたものを除外すると 40 例が残った。抽出された例には次のようなものが含まれた。

(17) あと、今限定のマックフルーリーのストロベリーショートケーキ美味し♪オレオとかより良い！！ (OY11_06085)

(18) 黒豆ソフトクリームと黒豆パン美味しいですよ。北神戸線&舞鶴自動車道なら渋滞知らずで行けると思います (OC13_03233)

(19) ちなみに内房線の五井駅、西口千葉銀の並びにあるラーメン天馬美味しいですよ！ (OC08_07193)

いずれの例も Yahoo! ブログや Yahoo! 知恵袋が出典となっており、比較的口語に近い形で書かれた文ではあるが、書き言葉の実例において無助詞文が使用されたものが確認された。(17) ~ (19) いずれの文脈も食べ物、あるいは店舗を他者に紹介し、勧める文脈である。他者に何かを勧めるという行為を行う上で、話者にとって重要な点は、ただ単純に対象の特性 (美味しさ) に言及することであり、他の比較対象への言及はとりわけ必要なことではない。ここでも 4.2 節で論じた通り、対象に対して単純に評価を差し出すという形容詞無助詞文の機能が文脈と整合し、形容詞無助詞文の使用を動機づけているといえるだろう。

なお、次のような例外的なもの、つまり助詞が生起する方が自然だと感じられる例もみられた。

(20) でわ、これから冷うどん美味しいですよね〜。 (OY15_04177)

(20) の例は季節の変わり目において、暑くなる季節は冷やしうどんが美味しく感じられる点に言及し

² キー: (語彙素="おいしい" AND 活用形 LIKE "終止形%")
WITH OPTIONS tglKugiri="|" AND tglBunKugiri="#" AND limitToSelfSentence="1" AND tglFixVariable="2" AND tglWords="20" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"

³ キー: (語彙素="おいしい" AND 活用形 LIKE "終止形%")
AND 前方共起: 品詞 LIKE "名詞%" ON 1 WORDS FROM キー
WITH OPTIONS tglKugiri="" AND tglBunKugiri="#" AND limitToSelfSentence="1" AND tglFixVariable="2" AND tglWords="20" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"

たものであると考えられる。この時、話者は特定の時期に食べる「冷やしうどん」の美味しさに焦点を当てていると感じられるため、「秋はサンマが美味しい」のようにガ格名詞で主語を示す方が自然であるが、実際には無助詞文が使われている。このような例は無助詞文の意味・機能による動機づけではなく、省略に近い例と考える方が自然であろう。このような例外はあるが、形容詞無助詞文は意味的にも機能的にも他の助詞を伴う形式とも異なる性質をもった形式であり、話し言葉だけでなく、書き言葉においても使用されることが確認された。

5. 結語と展望

本研究では形容詞無助詞文の解釈と使用の動機づけについて助詞の意味・機能と二価志向性とのかわりのなかで、形容詞無助詞文が対比的意味を避け、純粹に対象に対して評価を差し出す形式として機能し、話者による使用を動機づけていることを示した。なお、ここでは話し言葉を想定しつつも、語用論的な議論は不十分である点は否定できない。特に意図しない評価を避けるための形式選択という点はポライトネス理論との関連性も考えられる。また、認知言語学における構文理論との関連についても議論の余地があるが、本研究では特定の理論に基づかず分析を行った。これらを今後の課題とし、更なる分析、議論は他稿に譲りたい。

参考文献

- 長谷川ユリ (1993) 「話しことばにおける「無助詞」の機能」『日本語教育』80, 158-168
- Hayakawa, S. I. (1931) *Language in Thought and Action*. London: George Allen & Unwin Ltd.
- 樋口 功 (2000) 「指示と無助詞」『西南学院大学英語英文学論集』41(1&2), 69-78
- 樋口文彦 (2001) 「形容詞の評価的な意味」『ことばの科学10』東京:むぎ書房, 43-66.
- 加藤重広 (1997) 「ゼロ助詞の談話機能と文法機能」『富山大学人文学部紀要』27, 19-82
- 黒崎佐仁子 (2003) 「無助詞文の分類と段階性」『早稲田大学日本語教育研究』2, 77-93
- 荻宿紀子 (2014) 「「無助詞」研究の現状と課題」『早稲田大学 教育・総合科学学術院 学術研究 (人文科学・社会科学編)』62, 147-162
- Kuno, S. (1973) *The structure of the Japanese language*. MIT press.
- Lyons, J. (1977) *Semantics: I*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 丸山直子 (1995) 「話しことばにおける無助詞格成分の格」『計量国語学』19-8, 365-380
- 野田尚史 (1996) 『新日本語文法選書1「は」と「が」』くろしお出版, 東京.
- 小原京子 (2015) 「日本語フレームネットに見る文法と語彙の連続性」『日本認知言語学会論文集』, 15, 471-479. 日本認知言語学会.
- 尾上圭介 (1987) 「主語に「は」も「が」も使えない文について」(国語学会研究発表会発表要旨)『国語学』150, 40
- Voßhagen, C. (1999). "Opposition as a Metonymic Principle" in *Metonymy in Language and Thought*: 289-308

コーパス

国立国語研究所 「日本語書き言葉均衡コーパス」<https://clrd.ninjal.ac.jp/>